

フランス語の本を読み、世界の凹凸を知る

■ 峯村

傑

文学部仏文学専攻 教授

フランス近現代の小説を題材にして、いかに調べ、考え、書くのかを、とくにその出発点としていかに問題を発見するのか、いかに「躓く」のかを、学んでいます。

わたしの研究会は、おもに19世紀後半から20世紀前半までのフランス文学、とくに小説を研究対象にしています。しかし、それぞれのゼミ生が卒業論文の主題として選ぶ作家、作品は多岐にわたりますし、また、小説や文学一般の枠におさまらず、フランスにかかわる別の事象、たとえば映画やファッション、あるいは移民問題などに取り組み

例も、少なくありません。年によってちがいがあるとはいえ決して大所帯とはいえない人数のなかで、十人十色の関心が錯綜し刺激を与え合えることは、本研究会の強みだと思っています。

しかし、その関心の多様さ、つまり何を研究するかについてのばらつきを超えて、すべてのゼミ生に共通して学んでもらいたいと考えているのは、どのように研究するか、ということですが、いかに的確に、幅広く調べるのか、いかに繊細かつ大胆に考えるのか、いかに説得力のある文章を書くのか。いずれも大切ですが、とりわけ身につけてほしいものをひとつ選ぶなら、それは、

「躓く」力です。一冊の本をじっくりと読み、なぜかはわからないけれどもなに躓き、ひっかかり、そしてその「なぜ」と「何か」を追い求めていくことのできる、その術、その感性をもてば、それはかけがえない一生の宝になるはずです。

外国語を学び、外国語の本を読むことほど、そんな躓き方の習熟に適した手段はありません。異国のことばの道をしりじりと進むからこそ、世界が滑らかではなく、凹凸に満ちていることがわかります。ときに、小さな石だと思えたものが見上げるだに高い思考の頂であり、ちよつとした窪みだと映ったものが目もくらむほどに深い歴史の谷であることを、無類の感動とともに知ります。じつに迂遠な行程ですが、わたしの研究会では、その遅さを厭わず、まるで時間に限りがあるなどというのは嘘であるかのように、あたかも時が永遠に続いていくかのように、勉強していきたいのです。

新たな視点をもたらす場

尾崎 恵君 文学部仏文学専攻4年

当ゼミは、小説を中心に映画や文化など、19世紀から21世紀のフランスに関する事柄を幅広く扱っています。昨年度は、ボーヴォワール、コレット、ジョルジュ・サンド、ル・クレジオなどを研究対象とし、作家や作品をさまざまな観点から読み解きました。ゼミでは対象資料の潜在的価値を顕在化させることを目標に据え、各自が自由にテーマを設定し、研究、発表を行っています。皆がその一つひとつに関心を寄せ、示唆に富んだ多角的な意見が交換されることで、新たな視点で作品と向き合うことができている。そして、個々の研究に対するゼミ全体での深い関わりが、温かいゼミの雰囲気を作り出しています。



「？」を「！」に変えるプロセスを楽しむ

本研究会では、科学的思考を通してスポーツや運動器に関連した「？」をハイオメガニクスなどの手法を用いて「！」に変えるプロセスを楽しむことを目指しています。

おたにとしろう
大谷俊郎

看護医療学部 教授

私は2006年に医学部整形外科学教室から看護医療学部に着任しました。私のプロジェクトには2007年から現在まで延べ13名の学生が参加してくれました。プロジェクトの基本方針は、科学的思考を通して「？」を「！」に変えるプロセスを楽しむということですが、今までに持ち込まれたテーマはさまざまですが、どんなテーマでも「看護の視点」を忘れず、リサーチクエッションの背景に「相手に寄り添い支える」という発想があることを重視しています。学生たちは独自のテーマをもとに研究を進め、それを共有することで日々切磋琢磨しあっています。

最近では、自身がスポーツ外傷や手術を受けた体験から、患者として苦勞した点について看護の視点で調査を行った研究や、ロンドンパラリンピックへの帯同経験がある学生の、将来はナースの資格を持った障害者専門トレーナーとして障害者アスリートに寄り添いたいという発想から生まれた研究などがあります。また、ある学生は、自

分が指導している湘南藤沢高等部女子テニス部においてスポーツ外傷を予防したいと考え疫学的調査を実施しました。2014年度からは、日吉のスポーツ医学研究センターの橋本健史准教授の協力を得て、ウェアラブル端末を用いた動作解析も行っています。その成果として、ドラゴンボートの漕ぎ手の動作解析をした学生がSFC STUDENT AWARDを受賞しましたが、研究の背景には福島復興を目的とした子どもたちへの支援がありました。ダンスのターンの解析は、動作解析の結果をその場でフィードバックしてダンサーのパフォーマンス向上を支援したいという発想、バレーボールのレシーブ動作の解析は、初心者と熟練者を比較して初心者の技術向上に結びつけようという支援の発想によるものです。「？」からスタートした研究がある成果にたどり着いて「！」になったときに学生の目がキラッと輝きます。それが学生にとっても指導する私にとっても、一番楽しい瞬間です。

日頃の疑問を研究にする

ふなだまゆの
船田菜佑君 看護医療学部4年（執筆時）

大谷ゼミでは何らかのスポーツを題材にして各自が関心のあるテーマを設定し、研究を行っています。なぜだろうと思ったこと、興味のあることを科学的な視点から明らかにできることが非常に刺激的で、自分が知りたいと思ったことを自由に研究できるところが大谷ゼミの魅力です。初回のゼミで大谷先生が「君が知りたいと思ったことをテーマにしなさい」とおっしゃっていたことがとても印象に残っています。ゼミを通して大谷先生をはじめとする先生方にご指導いただき、自分が抱いた疑問の答えを研究で明らかにすることの面白さを感じています。

